

上原城下町遺跡

—平成 28 年度集合住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017.3

茅野市教育委員会

序 文

八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰高原に抱かれた長野県南東部にある茅野市は、豊かな自然に育まれた風光明媚な高原都市です。茅野市は国特別史跡の尖石遺跡、国史跡の上之段遺跡・駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡や、2体の国宝土偶（縄文のビーナス・仮面の女神）を保有するなど、日本の縄文文化を代表する優れた縄文文化がこの地に花開いた場所です。縄文時代の古くから人が住み始め、その痕跡は市内の広範囲に渡って残されています。長年の調査の積み重ねにより、連続した人の生活の様子が明らかになりつつあります。

この度、発掘調査を行った上原城下町遺跡は近年の開発により幾度となく発掘調査をしている遺跡です。茅野駅にも近く、早くから市街地化が進んだ場所であったため、大規模な調査が進んできませんでした。しかし近年は個人住宅だけでなく、比較的大きな集合住宅や店舗の建築工事や公共工事に伴う発掘調査の成果が集積されつつあります。

今回の調査では、集合住宅建築工事に伴う発掘調査を行いました。諏訪大社とも関わりの深い葛井神社にほど近い場所での比較的広い調査を行えたことで、遺跡の広がりや遺構の残り具合の確認、地形の把握をすることができました。こうした地道で慎重な調査の継続が重要と感じています。また、その成果が考古学、郷土研究に活用されることを切に願います。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたりまして、事業者の鶴殿むつみ様をはじめ、事業関係者の皆さまから遺跡の保護に対するご理解とご協力を賜り、円滑に調査を進めることができましたことを心からお礼申し上げます。また、発掘調査に従事された作業員の皆さまに感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

茅野市教育委員会
教育長 山田 利幸

例 言

1. 本書は平成 28 年度に実施した集合住宅建築工事に伴う長野県茅野市ちの上原所在の上原城下町遺跡に係る発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鶴殿むつみ氏の委託を受け、茅野市教育委員会が行った。
3. 発掘調査および整理作業・報告書作成は以下の期間に実施した。
試掘調査 平成 28 年 10 月 6 日～14 日
本調査 平成 28 年 12 月 6 日～平成 29 年 1 月 17 日
整理作業および報告書作成 平成 29 年 1 月 18 日～3 月 15 日
4. 発掘調査における委託業務は以下の業者に委託した。
基準点測量 株式会社両角測量
5. 発掘調査に関わる出土品、諸記録等は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管されている。
6. 発掘調査は茅野市教育委員会事務局文化財課が実施した。組織は以下のとおりである。
①調査主体者 山田利幸（教育長）
②事務局 木川亮一（生涯学習部長）
③文化財課 守矢昌文（文化財課長兼尖石縄文考古館長） 小池岳史（考古館係長） 正木美香（史跡整備担当）
小林深志（文化財係長） 山科哲 大月三千代 鶴飼幸雄 塩澤恭輔
④調査担当 塩澤恭輔（発掘調査・整理作業・報告書担当）
⑤発掘調査・整理作業参加者
補助員 武居八千代 酒井みさを 立岩貴江子 大勝弘子
作業員 柳沢省一 後藤信一 北澤俊弘 山田善興

凡 例

- 1 本書における挿図の縮尺は、図中に記してある。
- 2 層図における遺構の略号は以下のとおりである。
1号住居址→1住 1号土坑→1土
- 3 本書における土層の色調は、『標準土色帳』を参照した。

第1章 調査に至るまでの経過と経緯

平成28年9月、文化財保護法に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」が市教育委員会文化財課に提出された。これを元に施工業者との協議をした結果、掘削面積も広く、周辺の調査成果に乏しく地中の状況も分からないことから、工事に先立ち試掘調査を行うこととした。試掘調査では土壌改良が行われる建物部分を対象にトレンチを設定し遺構の有無と土層の堆積状況を確認することとした。試掘調査は平成28年10月6～14日にかけて行い、試掘面積は52.7㎡である。試掘調査にあたっては建物配置箇所3本のトレンチを設定した。重機を用いて耕作土を剥がしていくと、現況面下約60cmから砂混じりの黒色土が広い範囲で検出された。その高さからは土器も出土することから、ここから手作業で下げることにした。検出された遺構は住居址2軒以上、土坑9基、焼土址2箇所であるが、遺構が重なり合っているため捉えきれなかった。施工業者と遺構の保存を図りつつ工事を



第1図 224 上原城下町遺跡位置図 (1/20,000)

を進める方法を協議した所、表層改良を中止し、設計を変更してもらえることとなった。そのため、本調査への切り替えは行わず、トレンチ内の遺構プランの記録保存に留め試掘調査を終了した。

設計変更を行うため、施工業者による地盤調査が行われた所、地盤支持層に到達する前に礫層があり、柱状改良等の他の改良工法での基礎工事は困難であることが判明した。そこで改めて施工業者と市教委の間で協議し、当初の計画通り表層改良を行い、工事で失われる遺構については本調査による記録保存をすることとなった。事業者からの了解を得た後、本調査は市教委が行い、調査費用は事業者が負担することで合意した。11月28日に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、12月6日から発掘調査に着手した。

試掘調査から得られた堆積状況を踏まえつつ、重機による表土剥ぎを行い、その後人力での掘り下げ精査を進めていった。調査区北側1/3程は地山礫層が確認され僅かに残る土坑等の把握は問題なかったが、それ以南では全面に土器の混ざった黒色土が広がり遺構を捉えるのに苦労した。また、廃土場所が限られていたこともあり、作業は思うように進まなかった。そこで、調査区を二つに分け、記録を取り、記録が取り終わった方へ廃土を捨てられるようになると調査のスピードが向上した。平成29年1月5～6日にかけて任意の基準杭の設置・測量を行い、図面類の作成を進め、1月16日には調査を完了し、翌17日に埋戻しを完了させ現場作業を終了した。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

遺跡の地理的・歴史的環境

上原城下町遺跡は、霧ヶ峰山塊の南縁を形成する永明寺山(1,156m)の南西一帯が、広く遺跡として認識されている。永明寺山は花崗閃緑岩山で構成されているが、この地の花崗岩は非常に脆いのが特徴である。山裾より南にある上川沖積地に向かって広がる平坦な段丘面上に存在し、JR中央線と国道20号線に沿って長く伸びる。行政区上では上原区にあたる。現在は市街地にも近く交通の便も良好であることから市内でも人口の流入の多い地区の一つである。

遺跡の歴史的環境

当該遺跡は縄文時代から近世に渡って遺構・遺物が確認されている遺跡である。また、北は上田・佐久方面に通じる大門峠道、南は伊那方面に通じる杖突峠道が通り、西は諏訪・塩尻、東は山梨方面と各地を繋ぐ道の交わる地域に位置している。弥生時代以降、八ヶ岳寄りに集落を営んでいた縄文時代とは違って変わって、上原城下町遺跡や構井・阿弥陀堂遺跡、家下遺跡といった市内でも標高の低い一帯に生活場所を移している傾向にある。代表的なのは構井・阿弥陀堂遺跡のすぐ近くで、段丘下にある家下遺跡からは環濠集落や方形周溝墓も見つかっている。古墳時代になると茅野市内では数多くの古墳が築造され、永明寺山山腹にも数多く造られた。奈良時代については極端に検出例が少なく当時の様子は明らかとなっていないが、弥生時代、古墳時代を通してこの一帯が中心地であり、平安時代以降になってもそれは変わらない。加えて、中世に上原城の築城と城下町の形成によって広範囲に渡って遺構が広がっている。そうした痕跡と文献資料や今でも残る字名や小路名と合わせることで、城下町としての様子を伺うことができる。こうした長期に亘る人の営みがあったことから時代毎の遺構が重なり合うように残されており、茅野市の歴史を考える上でも重要な遺跡である。詳細な調査歴・調査成果については「上原城下町遺跡Ⅲ」（2009）で記されているため省略する。

第3章 発掘された遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代住居址 2 軒、中世土坑墓 1 基、土坑 18 基が検出された。

第1節 住居址（第3図、図版4）

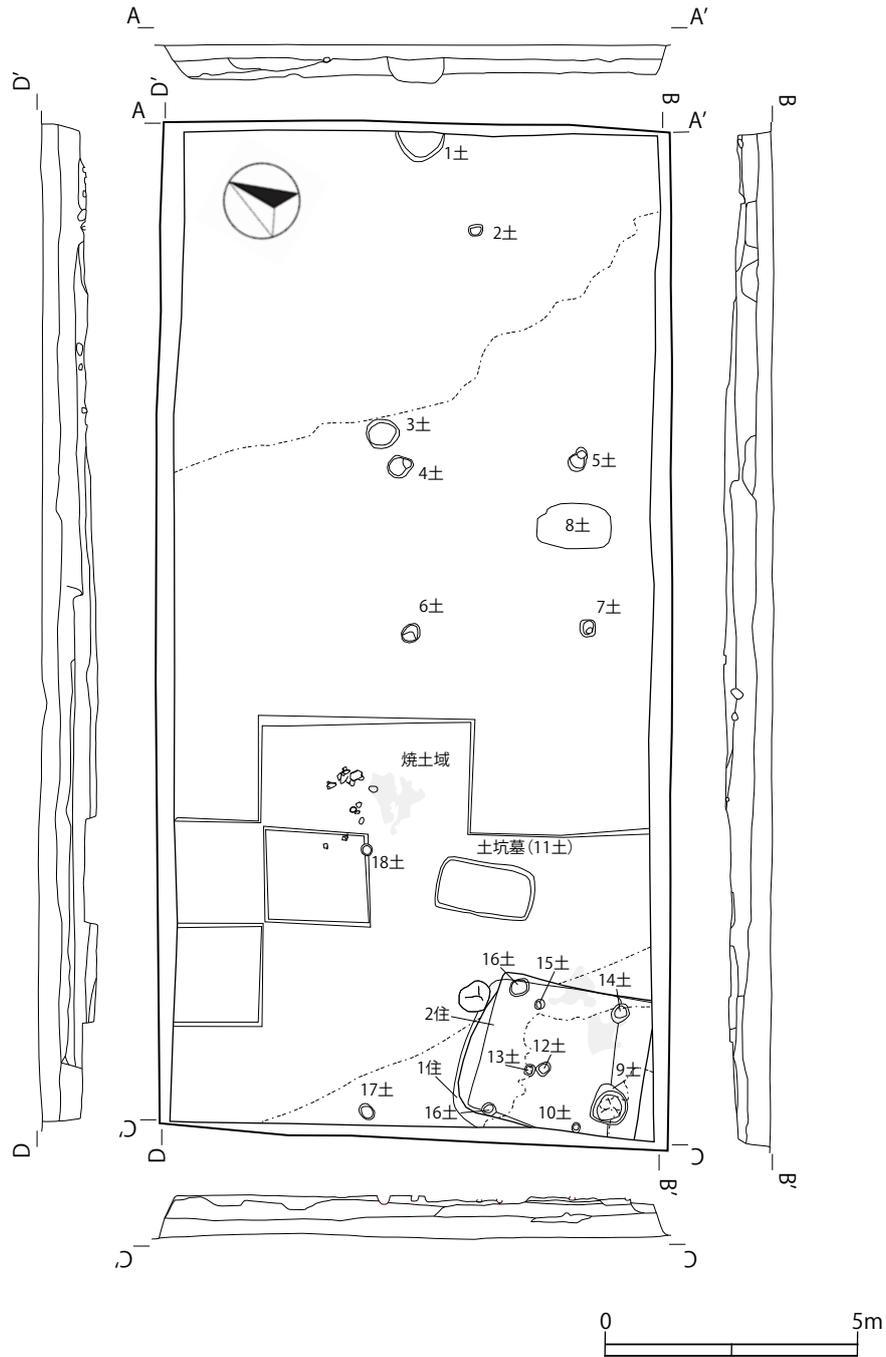
1号住居址

試掘調査の時点から遺構が確認されていたため、慎重に広げていった。隅丸方形を呈しており東辺中央には焼土址が分布する。硬く良く締まった床状の箇所が広く残り、慎重に広げていったが立ち上りは確認されなかった。部分的に焼土域がみられたが恐らく下の2住のものと思われる。

遺構内から出土した土器は若干であるものの、大半が古墳時代後期頃と思われる土師器であることから当該時期の住居址と推定される。



第2図 発掘調査位置図（1/2,000）



第3図 遺構全体図 (1/150)

2号住居址

1住と同様に試掘調査時から確認された。1住の床をはがすと下にも床状の硬く締まった箇所が広範囲で確認された。2住でも床面の検出のみで立ち上りは明確にできなかった。隅丸方形を呈する。

2住からの出土遺物は小さな土器片が若干出土しているのみであるが、1住より古い古墳時代後期頃のものとして推定される。

1・2住居址内土坑については住居址との関連は不明である。

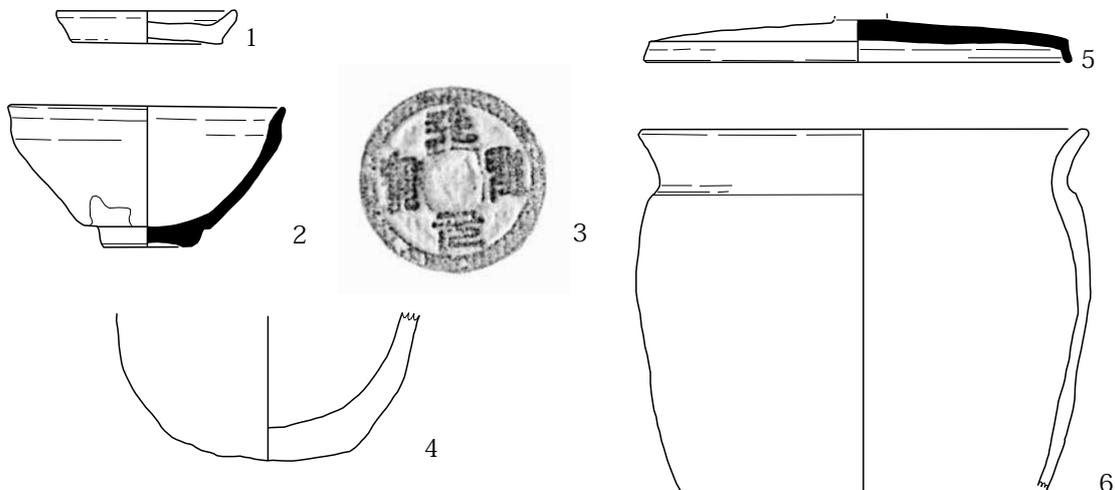
第2節 土坑（第3図）

全体で17基の土坑が検出されている。1号土坑は平面形態は円形と見られるが、大きさは不明。深さは16cmを測る。断面は柱穴状を呈する。カワラケ皿（第4図1）が出土している。2号土坑は平面形態は径30cmの不整形円形。深さは7cmを測る。断面は柱穴状を呈する。3号土坑は平面形態は径65cmの楕円形で、深さは13cmを測る。断面は柱穴状を呈する。4号土坑は平面形態は径50cmの楕円形で、深さは27cmを測る。断面は柱穴状を呈する。一部一段浅く硬く締まった箇所が残る。5号土坑は平面形態は径50cmの楕円形で、深さは18cmを測る。断面は柱穴状を呈する。一部一段浅く硬く締まった箇所が残る。6号土坑は平面形態は径40cmの楕円形で、深さは24cmを測る。断面は柱穴状を呈する。一部一段浅く硬く締まった箇所が残る。7号土坑は平面形態は径35cmの円形で、深さは17cmを測る。断面は柱穴状を呈する。一部一段浅く硬く締まった箇所が残る。8号土坑は平面形態は径145cmの不整形楕円形で、深さは3cm程度のごく浅い部分が残っているのみである。9号土坑は平面形態は径80cmの不整形円形で、深さは27cmを測るが、中央に地山由来の約50cmの大きな礫が埋まっている。10号土坑は平面形態は径20cmの円形で、深さは8cm。断面は柱穴状を呈する。11号土坑は平面形態は径25cmの不整形円形で、深さは5cm。断面は柱穴状を呈する。12号土坑は平面形態は径30cmの不整形円形で、深さは20cm。断面は柱穴状を呈する。13号土坑は平面形態は径20cmの不整形円形で、深さは4cm。断面は柱穴状を呈する。14号土坑は平面形態は径40cmの不整形円形で、深さは20cm。断面は柱穴状を呈する。15号土坑は平面形態は径20cmの不整形円形で、深さは25cm。断面は柱穴状を呈する。16号土坑は平面形態は径40cmの不整形円形で、深さは15cm。断面は柱穴状を呈する。17号土坑は平面形態は径30cmの不整形円形で、深さは17cm。断面は柱穴状を呈する。18号土坑は平面形態は径cmの円形で、深さは15cm。底は硬く締まっている。

第3節 その他の遺構（第3図）

焼土域は試掘調査の時から焼土址が確認されていたため、慎重に範囲を広げたが、遺構と捉えるに足りる要素が確認できなかった。しかし、焼土址一帯では須恵器蓋（第4図5）をはじめとする土器類がまとめて検出されており、土器から古墳時代後期頃の遺構と推定される。さらに言えば今回の調査では明確に捉えられなかったが住居址があった可能性もある。

土坑墓（図版5）は平面形態は100×195cmの隅丸方形を呈し、深さは32cm。覆土が柔らかく、灰色の土色であることから当初攪乱と考えていたが、掘り下げる内に宋銭（第4図3）や天目茶碗（第4図2、図版6）、赤い漆被膜片が出土した。覆土には炭化物が多く混ざる。天目茶碗は一部欠けがあるもののほぼ完形品で古瀬戸産の室町時代頃のものと考えられ、当該土坑墓の時期と推察される。



第4図 出土遺物 (1、2～5は1/3、3は1/1、6は1/4)

第4章 発掘調査の総括

今回の調査場所は古くは甲州街道であったとも言われる国道20号線から西に平行してはしる大町通りという通り名が残る道に面し、葛井神社にもほど近い耕作地である。周辺の方の話では古くから桑畑やリンゴ畑として利用されてきているという。耕作地であったため近隣での調査成果に乏しく、遺跡の中でも遺構の状況等、遺跡の実態が掴めていない場所であった。

試掘調査の結果から当初は調査区のほぼ全域に遺構が広がると考えていたが、慎重に掘り下げていくと調査区北側で出現している地山礫層が調査区中央で沈み込み、また南に向かって上っていくのを確認した。地形から見て、調査区一帯では北西—南東に向かって小さな谷若しくは窪地であった所に土が自然堆積したものと思われる。この自然堆積の中には僅かながら石器や土器片も見られることから、遺構覆土と捉えてしまった。実際には遺構としては古墳時代後期と思われる住居址2軒、中世室町時代の土坑墓1基の他には中世1基を除いた、時期不明土坑17基が検出された。遺構数や密度は薄いものの、地形の僅かな変化を捉えることができたことは大きな成果と考える。これまでの細かな調査から上原地区の地形は崩壊堆積地、扇状地、谷、段丘面という小地形を区分し、捉えてきた(小池2014)。今回の調査によりこの中の段丘面がやや小さくなる可能性が出てきたが、一方で小さくなくても住居を構えて生活をしてきた痕跡が得られたことでムラとしての在り方を探る手掛かりとなったと考える。

また、市内からの出土事例のごく僅かな中世土坑墓の検出は今後の調査の好例かつ、上原城下町の様子を探る上での重要な成果となった。調査区に面した道は大町通りと呼ばれ、他にも古くからの名前と道筋の残る一帯である。近年では集合住宅や宅地造成等で比較的大きな開発が進んでいる上原であるが、引き続き慎重で地道に調査を重ね、調査成果の集積と遺跡・歴史としての解明に取り組んでいきたい。

守矢昌文 1991 『上原城下町遺跡—詳細分布調査報告書—』 茅野市教育委員会

柳川 2005 『上原城下町遺跡—平成16年度茅野市播磨小路土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書—』 茅野市教育委員会

柳川 2009 『上原城下町遺跡Ⅲ—平成20年度茅野市上原公民館建設に伴う緊急発掘調査報告書—』 茅野市教育委員会

小池岳史 2014 『市内遺跡7—平成23・24年度埋蔵文化財発掘調査報告書—』 茅野市教育委員会

塩澤恭輔 2016 『構井・阿弥陀堂 上原城下町遺跡—平成26年度諏訪湖流域下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 茅野市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	うえはらじょうかまちいせき							
書名	上原城下町遺跡							
副書名	集合住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	塩澤恭輔							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101							
発行年月日	西暦2017年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえはらじょうかまち 上原城下町	ちのしちのうえはら 茅野市ちの上原	20214	224	36度 00分 09秒	138度 08分 34秒	20161006 ~ 20170117	204㎡	集合住宅建築工事に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上原城下町遺跡	集落跡	縄文時代 ~ 近世	住居址2軒 土坑18 土坑墓1 焼土址1	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、カワラケ、陶磁器、黒曜石、石器	市内でも発見例の隙ない中世土坑墓が確認された。			



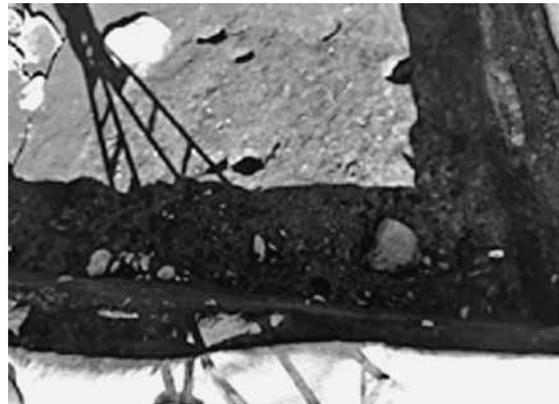
(1) 調査区北側完堀（南西から）



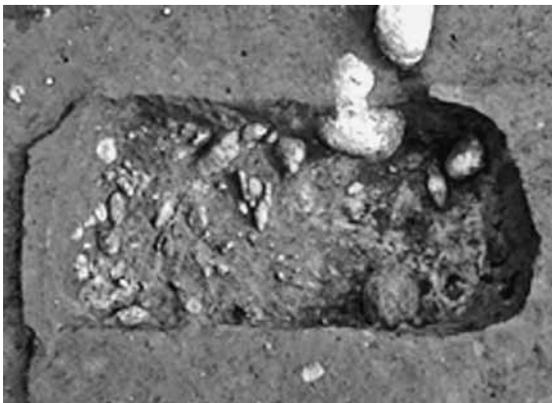
(2) 調査区南側完堀（北東から）



(3) 調査区南側完堀（南西から）



(4) 1・2 住完堀（南西から）



(5) 土坑墓完堀（南西から）



(6) 土坑墓内天目茶碗出土状況（北東から）



(7) 作業風景（南から）

上原城下町遺跡

—集合住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 29 年 3 月 10 日 印刷

平成 29 年 3 月 15 日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 長野県茅野市塚原二丁目 6 番 1 号 (0266) 72 - 2101(代)

印刷 永明社印刷所

長野県茅野市塚原二丁目 12 番 30 号